発話の場としての話し手と聞き手が反映された文法 ー連体修飾節を事例としてー
Syntax Concerning Speaker and Hearer as Ground : A Case Study on Japanese Adnominal Clauses

神澤克徳
Katsunori Kanzawa

京都大学
Kyoto University
rnkp43470@gmail.com

Abstract

The main purpose of this article is to show from the standpoint of Cognitive Grammar (CG) that in a language use our conceptualization considerably concerns syntactic phenomenon. We examine Japanese adnominal clauses as a case study. We find that the syntactic suitability of Japanese adnominal clauses has much to do with conceptualization involving pragmatical matters such as ground, scope or focusing of speaker and hearer.

Keywords —Cognitive Grammar, adnominal clauses, conceptualization, ground, scope, focusing, speaker and hearer

1. はじめに

生成文法を中心とする計算主義的言語学では、言語能力は他の認知能力からは切り離されたひとつのモジュールを形成するとされてきた。しかし認知文法(Langacker 1991, 2008 など)では、そのような言語能力の特殊性を認めず、意味論的な側面のみならず、これまで統語論にかかわるとされてきた事項を概念化という一般的な認知能力から説明する。本発表は、認知文法の立場から、日本語の連体修飾節の文法的適切性が発話における話し手(speaker)と聞き手(hearer)の際立ち(focusing)という語用論的側面を含む概念化(conceptualization)の観点から説明できることを示す。

2. 本発表で扱う問題

本発表は、ある言語表現の文法的適切性がその表現に関わる語用論的側面、特にある発話における話し手と聞き手の際立ちを反映する場合があることを認知文法の枠組みから明らかにするものである。本発表では日本語の連体修飾節をケーススタディとして扱う。

例文(1)はいずれも下線部を修飾部、名詞「映画」を主要部とする連体修飾節である。(1a)は、動詞「観る」の連体形「観る」が主要部の直前にある。(1b,c)は助動詞（(1b)は義務を表す「べき」、(1c)は推量を表す「らしい」）が主要部の直前にある。これらの助動詞にはそれぞれ好まれる主語があるため、今回の例文ではよく見られる主語（「べき」には二人称単数の「あなた」、「らしい」には三人称単数の「彼」）を仮に付与した。(1d)は動詞「観る」の命令形「観ろ」が主要部の直前にある。また、(1e,f)は終助詞「よ」「か」がそれぞれ主要部の直前にある。

(1) a. 試写会で観る映画はこれです。
b. あなたが試写会で観るべき映画はこれです。
c. ? 彼が試写会で観るらしい映画はこれです。
d. * 試写会で観ろ映画はこれです。
e. * 試写会で観るよ映画はこれです。
f. * 試写会で観るか映画はこれです。

例文の前部に付与されたクエスチョンマーク

(?)とアスタリスク(*)はその文の容認度を示す。クエスチョンマークはその文がやや不自然であるが、非文ではないことを示し、アスタリスクはその文が非文であることを示す。無標の場合は、その文が自然であることを示す。主要部名詞「映画」に接続する修飾部の末尾要素の適切性は以下のように示される。

(2) （適切←）動詞の連体形「観る」、助動詞「べき」＞助動詞「らしい」＞動詞の命令形「観ろ」、終助詞「よ」「か」（→不適切）

これをもうすこし一般化した形で示すことは可能だろうか。モダリティの観点から考えてみると、(1b)の助動詞「べき」は根源的モダリティ、(1c)の助動詞「らしい」は認識的モダリティとしての性質をもつと思われる(cf. Lyons 1977)。日本語において、根源的モダリティの性質をもつそのほかの表現としては「なければならない」などがあり、認識的モダリティの性質をもつそのほかの表現としては「だろう」などがある。「なければならない」と「だろう」を例文(1)と同様に修飾部の末尾要素として主要部名詞「映画」に接続させてみる。そうすると、「なければならない」を末尾要素とする(3a)は自然な文になる一方、「だろう」を末尾要素とする(3b)はかなり不自然な文になる。

(3) a. あなたが試写会で観なければならない映画はこれです。
b.?? 彼が試写会で観るだろう映画はこれです。

また、発話行為論の立場からすると、(1d-f)における修飾部はいずれも発話の力(illocutionary force)をともなう言語表現である。(1d)の修飾部は命令、(1e) の修飾部は陳述、(1f) の修飾部は質問という発話の力をともなう（cf. Austin 1962, 山梨 1986）。上での議論から、修飾部の末尾要素の適切性に関して、次のような仮説が成り立つ。

(4) （適切←）動詞の連体形、根源的モダリティ＞認識的モダリティ＞発話の力をともなう言語表現（→不適切）

では、この適切性の階層はどのように説明が可能だろうか。これまでは統語論の問題として説明されてきたが、本発表では認知文法の観点から、発話における話し手と聞き手の際立ちが関わっていることを明らかにする。

3. 認知文法におけるグラウンド、スコープ、焦点化

認知文法では、発話の場はグラウンド(ground)として捉えられる。グラウンドは、発話における話し手と聞き手、そして発話の場それ自体の総体である。また、認知文法が一般的認知能力に関わる事項とするスコープ(scope)や際立ちの問題も簡潔に述べておく。認知文法ではスコープに関して、最大スコープ(maximal scope 以下 MS)と直接スコープ(immediate scope 以下 IS)という入れ子式の構造を設定する。前者はある言語表現の基盤となる概念内容全体であり、後者はそのうち言語表現に直接的に関わる部分である。また、認知主体は状況に応じて、対象（状況によっては認知主体自身も概念化の対象になりうる）を前景化したり背景化したりする。言語化に関わるのは、直接スコープの領域で際立ちが与えられる対象である。

4. 連体修飾節の概念化

仮説(4)で見た日本語の連体修飾節における修飾部の末尾要素の適切性の階層は、それぞれの修飾部が異なる概念化にもとづいていることに大きく関係している。本節では、例文(1)の修飾部がそれぞれどのような概念化にもとづいているのかを明らかにし、 その概念構造のちがいが(4)の階層にどのように反映されているかを述べる。

4.1 ある命題的事態の概念化

例文(1a)を再掲したものが例文(5)である。この

連体修飾節において、修飾部はある命題的事態を表す。

(5) 試写会で観る映画はこれです。

認知文法の枠組みでは、概念化の構造は認知図式によって図式化される。(5)の修飾部の認知図式は以下のように表される。図中の矢印は「観る」という行為を表し、正円はその行為の主体(trajector)を表す。この場合行為と主体に際立ちが与えられ、言語化がなされる。

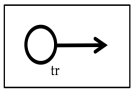

図 1 ある命題的事態の概念化

4.2 根源的モダリティにおける概念化

2 節で見たように、例文(6)の修飾部は根源的モダリティとしての性質をもつ「べき」「なければならない」を中心とする根源的モダリティ表現である。(6a)は(1b)の再掲、(6b)は(3a)の再掲である。

(6) a. あなたが試写会で観るべき映画はこれです。
b. あなたが試写会で観なければならない映画はこれです。

(6)の修飾部の認知図式は以下のように表される。根源的モダリティ表現では、4.1 で見た命題的事態とは異なり、グラウンド(G)が最大スコープ(MS)に位置づけられる。その中でも、話し手(S)が前景化されている（実線の正円でマークされている）。なぜなら、「べき」や「なければならない」が表す義務的意味は、グラウンドにおける話し手が社会的知識にもとづいて行う、命題的事態に対する主観的判断であるからである。話し手から伸びる破線の矢印は、命題的事態に対する主観的判断を表す。

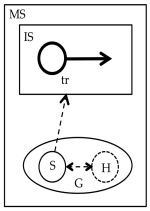

図 2 根源的モダリティにおける概念化

4.3 認識的モダリティにおける概念化

例文(7)の修飾部は認識的モダリティとしての性質をもつ「らしい」「だろう」を中心とする認識的モダリティ表現である。(7a)は(1c)の再掲、(7b)は(3b)の再掲である。

(7) a. ？彼が試写会で観るらしい映画はこれです。
b. ??彼が試写会で観るだろう映画はこれです。

(7)の修飾部の認知図式は図 2 の特徴をさらに強めた図 3 のように表される。Sweetser(1990: 59)は、根源的モダリティが社会・物理的領域(sociophysical world)に関わるのに対し、認識的モダリティは認識的領域(epistemic world)に関わるとしている。認識的モダリティ表現ではグラウンドにおける話し手が社会的知識にもとづいて行う、命題的事態に対する判断がより主観的になる。この場合、話し手の存在とその主観的判断はさらに前景化している（図中の話し手はより際だった実線でマークされており、破線の矢印もより太く示されている）。

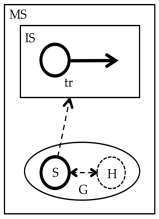

図 3 認識的モダリティにおける概念化

4.4 発話の力をともなう言語表現における概念化

例文(1d-f)を再掲したものが例文(8a-c)である。これらの修飾部はいずれも発話の力をともなう言語表現である。(1d)の修飾部は命令、(1e) の修飾部は陳述、(1f) の修飾部は質問という発話の力をともなう。

(8) a. * 試写会で観ろ映画はこれです。
b. * 試写会で観るよ映画はこれです。
c. * 試写会で観るか映画はこれです。

(8)の修飾部の認知図式は以下のように表される。この時、最大スコープ内のグラウンドはもっとも前景化される。ある命題的事態を命令や陳述や疑問で表すことは、話し手がその事態をどのように認識しているかに直接関わる。したがって図において話し手は前景化され、命題的事態に向かって破線の矢印が伸びている。さらに、話し手が命令、陳述、質問という発話行為を成立させるためには、聞き手(H)の存在が不可欠である。またオンライン上で、聞き手もその命題的事態を判断することが予想される。このようなことから、聞き手も実線で表され、命題的事態に向かって主観的判断を表す破線の矢印が伸びている。また、会話を成立させる上で話し手と聞き手が行うメンタルコンタクトも前景化される（S と H 間の両矢印で表される）。

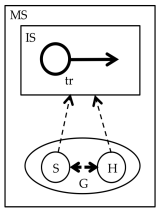

図 4 発話の力をともなう言語表現における概念化

以上の議論をまとめると、以下のように言える。

(9) 概念構造において、最大スコープ内にグラウンドが前景化すればするほど、その言語表現は連体修飾節の修飾部になりにくい。

5. まとめ

本発表は、認知文法の観点から、ある言語表現の文法的適切性が、その表現に関わる語用論的側面、特にある発話における話し手と聞き手の際立ちを反映する場合があることを日本語の連体修飾節をケーススタディとして明らかにした。日本語の場合、概念構造において最大スコープ内にグラウンドが前景化すればするほど、その言語表現は連体修飾節の修飾部になりにくいという結論に至った。4.4 で見た発話の力をともなう言語表現は、その概念構造において、話し手と聞き手間で行われるメンタルコンタクトが前景化されるという点で間主観的であるともいえる。すなわち、日本語では命題的事態よりもモダリティ表現のような主観的な表現の方が、また主観的な表現よりも発話の力をともなう言語表現のような間主観的な表現の方がより、連体修飾節の修飾部になりにくいと言い換えることもできる。言語能力を他の認知能力からは閉ざされたモジュールとして捉えるのではなく、一般的認知能力の反映として捉えることで、今後も言語現象に関して認知科学の分野との相互研究の可能性を模索していく必要がある。

参考文献

[1] Austin, J. L. (1962) *How to do things with words*. Harvard University Press.
[2] Givón, Talmy. (2001) *Syntax: An Introduction: Volume 1*. Amsterdam; Philadelphia: J. Benjamins.
[3] Lyons, John. (1977) *Semantics: Volume2*. Cambridge: Cambridge University Press.
[4] Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar: Volume II: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
[5] Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford

University Press.

[6] Palmer, F. R. (1986) *Mood and Modality*. Cambridge University Press.

[7] Ross, J. R. (1970) On declarative sentences. In Jacobs and Rosenbaum (eds.) *Readings in English transformational grammar*, pp.222-272. Waltham, Mass.: Ginn & Co.

[8] Sweetser, Eve. (1990) *From etymology to pragmatics: metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

[9] 澤田治美（2006）『モダリティ』東京: 開拓社.

[10]渡辺実（1978）「叙述と陳述−述語文節の構造−」服部四郎ほか編『日本の言語学 第 3 巻 文法 I 』pp. 261-283. 東京: 大修館書店.

[11]山梨正明(1986)『発話行為』東京: 大修館書店.